
東方小演舞<龍>

斉藤 孝之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方小演舞>龍<

【Nコード】

N3777M

【作者名】

斉藤 孝之

【あらすじ】

暑い日に木陰で避暑をしていた麻耶と文にチルノが絵本を持ってきて読むようにせがんで来た。

特にやることがなかった二人はエアコンが来たことに喜び（これは文だけ）それを了承する。

読み始めた文だったが、それは絵本とは程遠い、もはや別次元の本だった！

あなたはこれを読んで突っ込まずにいられるだろうか！

敢えて言おう、無理であると！

麻耶ちゃんシリーズの小説、第3弾！

ある日の出来事。

その日はいい天気で日差しが強かった。私と文は木陰に入り、和やかな談笑をしていた。

「今日は暑いわね。どうせだったら裸になろうかしら」

「いや、それはいろいろ問題があるからやめて頂戴」

友人を犯罪者にはしたくはない。私は全力で止めた。

「でも麻耶、こんな暑くちゃどうしようもないわよ？ 裸になれば少しは変わるかもしれないわ」

確かに文の言うことも分かる。それほどに今日は暑さが際立っていたのだ。

「何か涼しくなればいいんだけど…」

私がそうこう思案していると、トコトコとこちらに走ってくる人影が現れた。

「ねえ麻耶、絵本読んで」

それはチルノだった。途端に文の目が光るのを私は見逃さなかった。敢えて言おう！ 逃げて！

「ふふふ、カモが来たわ」

文さん、目が恐いです…。そんなことに少しも気づかないチルノは、目を輝かせて私たちの所にやってきた。

「絵本？」

私はチルノの手にある本に目が留まり、聞いてみることにした。

「うん！ なんかさつき見つけたの。どうせなら麻耶に読んで欲しいなって思っ」

こういう所は素直に可愛いと思えた。私はどうせやる事がなかったの了承しようと思えと返事をしようとする

「待つて。その役目、私が受け持つわ」

と文が語りだした。

「文が？」

チルノはキョトンとしている。無理もない、普段ならこんなことは絶対に言いそうにないのだから。

「ええ。その代わりここらを涼しくして頂戴。あなたも涼しい所で読みたいでしょ？」

「うん、分かった」

チルノは何も考えることなく答え、周りを微粒の冷気を漂わせた。一瞬で辺りが快適な気温となる。

「バツチリよ！　じゃあ読んであげるわ」

「うん！」

チルノは無邪気に目を輝かせ地面に座る。自分がエアコンの代わりになっているとは夢にも思っていないのだ。こんな事でこの子は大丈夫なのだろうか…。

「ほら麻耶、せっかく私が読んであげるのだからしっかり聞いてよね？」

「はいはい。わかったわよ」

私はとりあえず文の音読に耳を傾けてみることにした。

桃太郎　　明日を信じて

「ちょっと待って」

私はすかさず話を止めた。タイトルから意味不明だ。

「何よ、まだ話の途中なのよ？　一々茶々入れないで」

「すいません…」

私はただ謝るしかできなかった。それにしても「桃太郎」明日を信じて」ってどんな話なのだろう。逆に興味が出てきた。

昔々、ある所にヤンキーの青年とお婆さんが住んでいました。

「そんなバカな！」

「麻耶うるさい！」

チルノに咎められてしまった。それにしてもこの本は文章一つ一つに突っ込みを入れるように出来てるのかしら？　あと二人は親子なのかしらね。ここからどう桃太郎が出てくるか見物ね。

二人は互いに喧嘩をし、争う事も多かったのですが、仲がとても良かったのです。そんな…

夫婦でした。

「夫婦!？」

私は思わず聞き返した。

「麻耶、いい加減にして頂戴よ。全然お話が進まないじゃない」

「そうだ、そうだ!」

文とチルノにブーイングをくらう。だって青年ってことは20代でしょ？ お婆さんてことは70代と考えて…。50歳差とかありえないでしょ。いや、そもそも絵本でヤンキーって…

「あなたはこれから黙ってなさい」

文からキツイお達しを言い渡された。守れるかはまったく自信はなかった。

ヤンキーの青年はいつも悪さばかりしていました。

ある時は、隣町で喧嘩をしたり、またある時は物を壊したりと、多くの人に迷惑をかけていました。

そしてお婆さんは山へ芝刈りに、またある時は川に洗濯にと毎日大忙しでした。

そんなある日、青年に負けた者たちが集まり、彼に復讐をしようとする動きがありました。青年はそれを聞くと笑みを浮かべ、隣町に出向こうとしましたが、そこでお婆さんに止められました。

「そんなことはおよしよ。怪我をしたらどうするんだい？」

しかしそんな事で青年は止まりませんでした。

「うるせえ。一々俺の事に指図するんじゃない！」

青年はお婆さんの制止を振り切り、隣町に行ってしまいました。

そして隣町で決闘が始まります。それはそれは激しい戦いでした。1人、また1人と倒れていきます。しかしそれでも青年は倒れることはせず戦い続けました。

どれほどの時間が経ったのでしょうか。ついに青年は勝利を収めました。

「やった……」

青年に充実感が満ちました。なんとも言えない快感。その快感に青年は身を委ねていました。それが悲劇の幕開けとも知らずに……。

「な、なんか殺伐というか、ヤンキー物になってきてない？」

私は思わず呟いた。これのどこが絵本なのだろう……。というか桃太郎は？

「いい感じに話が進んできたわね。チルノ、準備はいい？」

「うん！」

2人はノリノリだ。私の感覚がずれているのだろうか？ 誰か教えて欲しいものである。

青年は快感に身を委ねる事で油断をしていました。なんと倒したと思われた男はまだ戦意を失っておらず、ナイフを手に持ち、青年に襲い掛かったのです。

そんなことに気づかない青年はまったくの無防備でした。襲い掛かる男があと少しという所でやっと気がついたのです。

青年は死を覚悟しました。青年は自分の命に執着が無かったのです。死ぬときは死んでしまおう。そう考えていました。だから全てを諦めました。

しかし、そんな青年の前に人影が割り込みます。なんと、青年を心配したお婆さんが、青年を守る為に飛び込んだのです。

ナイフを持った男は驚きましたが、それ以上に青年は驚きました。この隣町は青年の家からかなりの距離があります。それは年をとっているお婆さんにとっては非常に大変な道のりなのです。そして何よりあんな突き放し方をした自分を心配してくれるとは夢にも思わなかったのです。

ナイフを持った男は血を流すお婆さんを恐れ、逃げ出します。そしてそれと同時にお婆さんの体が崩れるように倒れます。青年は慌てて抱きかかえます。

「な、なんで来たんだよ……。こんな遠い所にさ。お前、体の調子が悪いんだろ？ ちゃんと休んでないと駄目じゃないか」

青年は本当に理解できなかったのです。何故お婆さんがこの行動に出たのかを。それをお婆さんは優しく説明します。

「何かね、嫌な予感がしたんだよ。虫の知らせかね。あんたが危ない目にあいそうな予感がしたんだよ。私はもうあんまり長くないこ

とは分かつてる。自分の事だからね。でもアンタはまだまだ若い。これから色んな事が訪れる。それはいい事だけじゃないかもしれない。悪いこともいっぱいあるかもしれない。でも、私はそれでもアンタに生きてほしかった。だから例え無駄になろうともここに来たんだよ」

お婆さんの体が少しずつ冷たくなってきたるのが青年には分かりました。

「生きておくれ。私はそれが望みだよ…」

そう言い残し、お婆さんは静かに息を引き取りました。青年は涙が溢れて止まりませんでした。こんなに涙を流すのはいつ以来でしよう。

「バカ野郎…。いやそれは俺か…。まったくなんだよそれ…」

青年は涙を拭きます。あまりずっと泣いているのは情けないと思っただからです。そしてお婆さんに最後の言葉を残します。

「すでにいい事が来ちゃったよ。お前のせいだな…」

「うっ…」

「なんでアンタが号泣しているのよ？」

文が私を呆れて見ている。私は涙を流し、鼻水を垂らしながら文を見ると顔色一つ変えていなかった。アンタは鬼か！

「なんで文は何も思わないのよお…」

「だって所詮は作り話じゃない。そんなんで感動なんてしないわ」

まったくこれだから文は…。それにしてもいい話だったわね。

「それじゃ続きを読むわね」

あれ？ 続き？ いいクライマックスだったけど？

そして何やかんやで桃太郎は生まれたのです

「私の涙を返せ！」

「何よ？ 一体何が不満なのよ？」

文は心底不思議そうに問いかけてきた。無性に殴りたくなるのは何故だろう。

「あなた何も思わないの？ 途中までいい話だったのに、全部台無しよ！」

まあ桃太郎はこれっぽちも関係ない話ではあったのだけれど。

「そんなの私の責任じゃないし」

「ぐっ…。まあ確かにそうだけど…」

「話続けていいかしら？ そろそろクライマックスらしいしね」

「い、いいわよ！」

もうヤケクソだ。最後まで聞いてやろうじゃない！

桃太郎は桃家の一人息子として生まれました。

「え？ 桃太郎って名前じゃないの？」

「当たり前でしょ？ あんた何言ってるの？」

文は何も思わないらしい。でも私たちは日本人は桃太郎と聞けば、それが名前だと思うのは当然だと思う。まさか桃太郎だったとは…。

太郎は幼い頃、両親を病で無くし、途方にくれていたところを青年に拾われました。青年はお婆さんを亡くした直後であり、寂しさを忘れる為に一緒に暮らすことを提案したのです。

太郎はすすく育ちました。青年は太郎の成長こそが生きがいであ

り、支えでした。今までは殆ど続かなかった仕事も懸命にこなし、必死に働きました。決して裕福ではありませんでしたが、そこには確かな幸せがあったのです。

しかしそれも長くは続かなかったのです。ある日、青年は仕事終わりに仲間と飲みに行きました。するとそこで酔っ払いに仲間が絡まれてしまいました。

そして徐々にヒートアップしていき、ただの口論が次第に殴り合いに変わっていきました。さすがにこのままではまずいと感じた青年は間に入ろうとしました。

ですが、この時相手は頭に血が上り、凶器を手にしていました。そして間に入った青年を刺してしまいました。

青年は崩れ落ち、病院に搬送されましたが、回復することなくこの世を去ってしまいました。

太郎は青年の死を知るとふと思うようになりました。太郎にとって、青年は強さの象徴でした。強く、逞しい青年は太郎の憧れであったのです。しかしその青年はあっさり死を迎えてしまった。

では、強さとは何なのか。太郎はそれを知りたくなりました。そして己を強くすることを目指すようになりました。

まず太郎は世界を廻る事にしました。多くの人と触れ合う事で見聞を広めようとしたのです。鬼を倒すことでレベルアップをし…。

「はい、ストップ」

「今度は何よ？」

文はうんざりしたように私を見る。しかしここは聞き逃せない！

「鬼倒したの？」

「ええ。そう言ったでしょ？」

「じゃあ終了？」

「いいえ。続きあるけど？」

「んなバカな！？」

桃太郎って鬼を退治する話じゃなかったっけ？ 桃太郎って何の話

だか分からなくなってきた。おかしいのは私なの？ 誰か教えてください！

太郎は多くを学んだ。そして多くの人達と出会った。気がつけば多くの年月が流れた…。

そして……

時は19××年

核の炎に焼かれ地球上の生物はすべて消滅したかのように思えた。しかし、人間だけはこの荒れ果てた大地に生き残った。力はすべてを支配するようになったこの世の中にひとりの救世主が舞い降りた！

「もういい、もういい！」

私は思わず「アタタタタタッタ」と叫びそうになるのを堪えた。というかこれって…。

「はあはあ……」

私は必死に呼吸を整えた。何故話を聞いているだけなのにこんなに疲れるんだろう？

「もう絵本は終了！ そろそろ日も傾いてきたし、いいでしょ？」

随分と時間が経っていたようで、すでに夕焼けが見え始めていた。私は頃合と見てそう切り出した。文も暑くなさそうと思ったのか

「そうね。じゃあチルノ、今日は終わりね」

と賛成してくれた。

「わかった。じゃあね」

チルノは絵本を持つと去っていった。しかしなんだか日本の絵本を誤解していそうで恐い。まあ、チルノはアホだし、その内忘れそうだが。

「いい暇つぶしになったわ。たまにはチルノも役に立つのね」

楽しんでるのは私以外という事を叩き込んでやりたいと心底思ったが、口にすることは堪えた。

「あ、そうだ。麻耶」

「何？」

「今度南の島に一緒に行かない？」

「南の島？ いいけど、どうやって？」

「何か、ムラサがいい島見つけたらしいのよ。是非行ってみたかったのよね」

「本音は？」

「皆の水着姿を撮りたいから」

「なるほどね」

にしても幽霊船で南の島にバカンスとか、かなりシュールな気が……。まあいいか。

「わかったわ。で、いつにする？」

「そうね……。来週でいいかしら？」

「了解。皆に伝えとくわ」

「お願いね。私はムラサに連絡するから」

色々苦労しそうだが、楽しみであるのは事実。また一つ夏の思い出ができそうだ。

夏はまだまだ続く……

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3777m/>

東方小演舞<龍>;

2011年10月5日19時23分発行